

総体と結合

——ジャヤンタ・バッタのプラマーナ論を中心に——

趙 世 弘

1. はじめに

カシミール地方で活躍してきたニヤーヤ学派の学者ジャヤンタ・バッタは、自身の著作である *Nyāyamañjarī* (=NM) 第1章におけるプラマーナの定義をめぐる議論において、自身が所属していたニヤーヤ学派内部およびミーマーンサー学派の反論に回答する際に、総体 (*sāmagrī*) と結合 (*saṃsarga/saṃsr̥ṣṭi*) という二つの用語をもって議論を進める。しかし、両語に関する研究は少なく、二つの概念にどのような差異があるのかは解明されていない。本稿では、NM 第1章におけるプラマーナの定義と、それと関連する一連の議論を中心に、この二つの概念の用例を分析し、その差異を明らかにしたい。

2. 総体とはあらゆるものの集まり

ジャヤンタは NM 第1章において、プラマーナを「(事実・真理からの) 逸脱のない、疑いのない、[実在する] 対象の認識をもたらしところの、知および知ならざるものを本質とする [原因] 総体」(丸井 [2014: 408]) と定義し、この原因総体が認識に関する主体や結果などを有し、認識結果を生み出す最も有効な手段として見做していた (丸井 [2014: 409, fn. 45], 山上 [1980: 41] を参照)。この定義は従来のニヤーヤ学派のプラマーナ定義とは大きく違うため、その妥当性が問われるであろう。その後、ジャヤンタはニヤーヤ学派内部の五つの反論を想定し、自身が提唱するプラマーナの定義を正当化してきた (丸井 [2014: 409–410, fn. 45])。それらの反論において、第四と第五の反論およびそれらに対する回答にはジャヤンタ自身の総体という語の理解が示されている。第四の反論は、認識対象と認識主体が原因総体に含まれたら、認識の成立は不可能で、しかも *Nyāyabhāṣya* (=NBh) の記述とは違反する、というものである (NM I, p. 32, 5–7)。これに対して、ジャヤンタは、原因総体が成立した時点で、それは各集合構成要素 (*samudāyin*) の集合

(samudāya) であるが、総体それ自体が構成要素に依存して手段として存在しうるので、個々の構成要素は自身の性質を失わず、認識主体と認識対象も存在している、と回答する (NM I, pp. 35, 1-36, 9)。第五の反論は、原因総体という手段によって働くという表現は習慣的な言葉遣いと食い違い、しかも具格語尾も付けられていない、というものである (NM I, pp. 32, 7-10)。ジャヤンタはこの反論に対して、原因総体は実に緊密な複合 (saṃhati) であり、個々の要因はその中に含まれている。本来手段に対して使われるべき具格語尾が使われないのは、原因総体の卓越性 (atīśaya), すなわち結果を生み出す最も有効な働きがその中の個々の構成要素に付託されるからである、と回答する (NM I, p. 36, 10-37, 4)。

sāmagrī とは samagra (〔総体の〕 全て [の構成要素]) の派生語で、「全ての構成要素を有する総体」と理解してもよい。ジャヤンタの記述を見ると、総体は集合と緊密な複合とは同義語であり⁸⁾、ジャヤンタが支持する「別の人々」の観点においても総体を集合と同一視する言い方も存在している⁹⁾。

ジャヤンタの観点は、全体 (avayavin) と部分 (avayava) との関係に関する論争に踏み込んだと見える。しかし、総体と全体は同一視されうるか。Hayes [1986: 21, 26] が指摘したように、samudāya とは全体として見做される集合、あるいは一組の事物で、samudāyin とはその集合の構成要素である。一方、全体と部分とは組み立てを持つ有機体としての全体とその部分を指す。つまり、集合と全体とは異なる実体である。ジャヤンタがその相違を意識し「行為成立要因のかたまりにより完成される別の実態が存在しなくても、集合を自性とする〔原因〕総体はまさに存在している」と考えている (NM I, p. 36, 1-4)。例えば、布、軍隊、森などの全体が存在しなくても、それらを構成する糸、兵士、木の集まりが存在している。総体に本質的な変化がなければ、全体にはならない。換言すれば、総体や集合とは組み立てを持つものではなく、その構成要素に対して卓越性を持つ範疇、あるいは一定の範囲にあるあらゆるものの集まりである。

3. 結合とは期待を有する結び付き

動詞 sam-√srj の派生名詞 saṃsarga/saṃsrṣṭi は「結合、混合、結び付き」を意味する。この二つの用語は、NBh と Nyāyavārttika (=NV) における用例が少なく、基本的には元素論や身体の構成と関連する文脈で現れる。それらの意味はただの結合、あるいは混合・関係である。ではジャヤンタが理解している結合とは何であろうか。

前述したニヤーヤ学派内部の五つの反論の中で、第一の反論は原因総体の卓越性に関してその妥当性を問うている。ジャヤンタはこれに対する回答の中で、次のように言う。卓越性は直後に生み出す能力ではない。なぜなら、遠くにある（すなわち直接関連していない）補助行為成立要因も行為成立要因としての能力を無くさないからである。認識が生み出された際に、直接に生み出さないものは存在しない。その理由は、「感覚器官、マナス、認識対象など〔原因総体に含まれる〕全てが互いに結合する時に (itaretarasamsarge), 認識が完成されるからである」(NM I, p. 33, 4-6)。

ここでは、原因総体内部の要素が互いに関係を持つことが結合と呼ばれる。感覚器官、マナス、認識対象などが全て揃った際に、その認識対象に対する認識がもたらされる。その他、ミーマーンサー学派の学者たちが認識の過程を解釈する文脈においても、結合という用語が使われている。彼らは、「調理する」という動作に対して穀物、水、火、調理容器などの行為成立要因がそれを認めて (urāṅkṛtya) 結合するように、各感覚器官とマナスと認識対象との接触があれば、「認識する」という動作は現れる、という観点を打ち出す (NM I, p. 43, 3-10)。これに対して、ジャヤンタは、各行為成立要因は動作にではなく、結果のみに対してそれを認めて結合する、という結論に導くために論駁する。すなわち、A. 行為成立要因が完成されるべき動詞語根の意味と結合するとすれば、もし全ての要因が一斉にその意味を有する動作を完成させるなら、個々の要因が自身の動作を失って、全体的な動作が消えてしまう。もし個々の要因が別々に働くなら、一個の要因だけで全体的な動作がもたらされて、要因の結合と動詞語根の意味との関連が消えてしまう。B. もし原因は動作と結合すると主張するならば、ミーマーンサー学派の学者たちには、最終の動作と行為成立要因の結合はどちらが先に存在するかの問題がある。しかしいずれにしても合理的な考えではない (NM I, pp. 47, 14-49, 5)。

上述の議論を見ると、行為成立要因の結合とは、まず諸行為成立要因が原因総体に属さないものを認めた後に、それらの要因同士が互いに結合することである。ここでの「認める」とはある種の期待ともいえるのであろう。ミーマーンサー学派の学者たちにとって、その原因総体に属さないものは完成されるべきある種の動作であるが、ジャヤンタはそれを最終の結果と考える (NM I, p. 48, 2-3)。彼は、「特定の結果〔すなわち粥〕によって区別された、集合したデーヴァダッタなどの全ての行為成立要因の一連の動きこそが「調理」である、と言われ

る。実は、それこそが動詞語根√*pac* の意味である」(NM I, p. 50, 6–7)。という観点
を提示する。つまり、原因総体は結果を生み出す最も有効な手段である。しか
し、各行為成立要因がただ自らの働きをするだけならば、自らの結果しか生み出
さない。それらが集合した時のみ「調理する」などの動作の表現が最終の結果
(例えば粥など)によって可能となる。

4. おわりに

NM 第1章における総体と結合との差異と関係をまとめると以下の通りであ
る。A.「総体」とはそれの全ての構成要素を包摂し、集合や緊密な複合と同一視
される、一定の範囲内のあらゆるものの集まりである。「結合」とは総体の構成
要素が総体以外のもの、つまりある種の結果に対する期待が存在する時の互いの
結び付きである。B.「総体」が成立する時は既にその構成要素の「結合」を想
定している。そうでないなら、各行為成立要因は自身の働きしかしないため、最
終の結果を生み出せない。

〈略号表〉

NBh *Nyāyabhāṣya. Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyāṭīkā & Viśvanātha's Vṛtti*. Ed. Taranatha Nyaya-Tarkatirtha and Amarendramohan Tarkatirtha. 2 vols. The Calcutta Sanskrit Series, no. 18. Kyoto: Rinsen Book Co, (1936) 1982.

NM *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa with Ṭippanī—Nyāyasaurabha by the Editor*. Ed. K. S. Varadacharya. 2 vols. Mysore: Oriental Research Institute, 1969–1983.

NS *Nyāyasūtra*. NBh を参照。

NV *Nyāyavārttika*. NBh を参照。

〈参考文献〉

Hayes, R. P. 1986. "Uddyotakara on the Whole and its Parts." 『哲学』 38: 17–30.

丸井浩 2014. 『ジャヤンタ研究——中世カシミールの文人が語るニヤーヤ哲学——』 山喜房
伝書林。

山上證道 1980. 「sādhakatama の語義をめぐる Jayantabhaṭṭa と Bhāsarvajña とに伝承された諸
見解」 『密教学』 16/17: 31–47.

〈キーワード〉 *Nyāyamañjarī*, 総体, 結合, *sāmagrī*, *samsarga*

(京都大学大学院)